

基調
講演

森林と人との新たな関係性を求めて ～若者はなぜ森林と林業に向かうのか～

プロフィール

佐藤 宣子 (九州大学大学院農学研究院教授 (農学博士))

1961年、福岡県生まれ。専門は森林政策学、山村社会学。現在、林業経済学会会長、NPO法人九州森林ネットワーク理事長、国土審議会山村振興対策分科会特別委員、Small-scale Forestry編集委員などを務める。著書『地域の未来・自伐林業で定住化を図る～技術、経営、継承、仕事術を学ぶ旅』(2020年)全国林業改良普及協会など。



講演
要旨

近年、「田園回帰」と呼ばれる若者の都市から農山村への移住が注目されています。自然災害の常態化や新型コロナウイルス感染症のパンデミックなど、社会情勢の変化は若者のライフスタイルや働き方の変容をもたらしていると指摘されています。農山村への移住のきっかけの一つとなっているのが林業をはじめとする森林を基盤とする産業への就業です。どのような若者が何を求めて森林や林業を目指しているのでしょうか？その中に森林と人との新しい関係性を展望しうる動きはあるのでしょうか？

報告では、「自伐型林業」に参入する若者を対象にしたアンケートとインタビュー調査結果を紹介しながら、未来を見据えた「楽しい・嬉しい」林業のあり方、新しい森林業の可能性についてお話したいと思います。「自伐型林業」とは、主に自家山林を自家労働力で施業してきた自伐林家の技術を継承しつつ、山林を所有しない場合であっても受託や借用によって山林を確保して自立・自営で林業を行うものをいいます。様々な経験を有する若者の参入がみられ、森を使った新しい生業の模索も始まっています。

森林は長い時間スパンの中で考える必要があります。私たちが目にしている森の姿は過去の人々の営みの中で形成されてきました。現在、戦後に植えられた人工林資源の多くが利用可能な段階にあり、伐採活動が活発化しています。伐採とその後の更新方法、さらには森林利用のあり方は未来の森林、国土の姿を規定します。報告では、森林と人との関係性の変化を歴史的に辿りながら、若者が取り組み始めている林業の意義についても考えてみたいと思います。



若者が参加した作業道研修後の集合写真
写真提供：NPO法人自伐型林業推進協会
(写真撮影：福井きととき隊代表・宮田香司氏)



自伐型林業者の間伐材搬出の様子
写真提供：宮崎聖氏

講演
1

森の設計士 (Forest Architect) が描く、森林業について

プロフィール

西野 文貴 (株式会社グリーンエルム 代表取締役、東京農業大学 特別研究員、博士(林学))

1987年大分県生まれ。苗木生産会社を2023年に事業承継し、現在では植生調査、種子採取、樹種選定、苗木生産、植樹祭などを一貫して行う森づくりコンサル業に挑戦している。また、林業施業が行き届かない山林を買取りもしくは委託を受け、森の設計士としてその土地に適した樹種(15～40種)を選定し植えることで災害に強く、生物多様性豊かな森に変えるプロジェクトも立ち上げている。



講演
要旨

現在、世界中で環境(森林)に対して関心と重要性が高まっていると思います。そんな中、日本の森林率は先進国では世界第二位に位置し、森林との向き合い方、付き合い方が今まで以上に問われていると思います。